巻頭特集

漁村の歴史を刻む
大漁旗職人万助屋

大漁であることを漁船から浜に知らせるために掲げた大漁旗。本来の目的での使い方はほとんどなくなったが、新造船のお披露目や正月、祭りの際に「ハレ」の旗として華やかに飾られる。尾鷲にはたった一人の大漁旗職人がいる。この道七十年のベテラン・山本昇吾さんだ。

万助屋三代目 山本 昇吾さん
力強く色鮮やかな旗を描き続ける

青い海に映える鮮やかな大漁旗

港町に翻る大漁旗を東紀州で唯一製作する「万助屋」。山本昇吾さんが一枚一枚描いて、染め上げる。

大漁旗は元来、沖の漁船から港で待つ家族や仲間に、いち早く大漁の知らせを伝える信号旗の役目を持つものであった。船乗りは「板子一枚下は地獄」といわれるように、危険に満ちた厳しい現場で、経験と勘に頼ることが多い。それゆえ大漁旗には豊漁を願い、海上安全を祈る漁師の信仰心が込められ、恵比寿や宝船、熨斗（のし）に日の出といった縁起のいい絵が、感性によって鮮やかな色彩で描かれる。単なる印旗ではなく、力強く、美しく、勇壮。そんな迫力を生み出す心と技は、昔も今も変わらずに受け継がれている。

万助屋は昇吾さんで三代目。明治二十六年創業で、祖父・満助さんの代から百年以上続く。藍染めと着物の洗い張り、紋付きの上絵を商いとし、父・有吉さんが手伝いはじめた頃に、大漁旗や幟（のぼり）などの染め物をするようになった。かつては尾鷲にも万助屋のほかに二、三軒あったという。

絵心を生かし この道七十年

昇吾さんがこの世界に入ったのは、十七歳のとき。大学への進学も考えたが、戦後の東京を見た昇吾さんは尾鷲へ戻り、父親の弟子となった。

「親子やで口答えするし、ケンカしながら。そうなると『おまえは他所のメシ食っとらんで人間できとらん』って言われましてね」。京都へ修業に出るという話もあったそうだが、次第に尾鷲の遠洋漁業が最盛期となり、毎月が進水式。大漁旗の注文が相次ぎ、徹夜もしょっちゅう。有吉さんも仕事をテキパキこなす息子を外へ出すわけにはいかなかった。

洋服の時代に、洗い張りでは食いはぐれるといけないと、クリーニング業もはじめた。尾鷲で最初にドライクリーニングの設備を整え、技術者を招き、資格も取得。しかし、旗をしながらとあって中途半端になり、大漁旗のほかに幟や暖簾（のれん）なども請け負っているうちに染め物だけを専門にするようになった。

「絵と字を描くのは大好きやった。あと、化学（ばけがく）も得意中の得意」と、もっぱら染め物のセンスがある昇吾さん。絵や文字には味があり、広い面積に描かれるバランスも抜群だ。白い布への下絵は一気に進めてしまう。それをテレビの生出演でやってのけたこともあるそうだ。

染めるには反応染料を用いる。染料を布に定着させるためにアルカリ性の反応液を併用し、布上で化学反応を起こすことで固着させる方法だ。生地を中から染め上げているので、堅ろう度が高く、丈夫な仕上がりだ。

布に下描きをしたら、まずは染めない部分を作るため防染方法をとる。筒袋に糊を入れた筒引きで、防染糊を置いていく。しっかり乾燥させてから、染料をつけた刷毛で布を染めていく。ムラが出ないよう、正確さと速さが求められ、計算された染め方がグラデーションを作る。その後、アルカリ性の固着剤を塗り、色を固着させてからソーピング。余分な染料と糊を落とす。

染め物で一番気をつかうのは「糊置き」だという。「色の付いた部分ではなく、白に一番苦労する。塗るのは鼻歌を歌いながらでもできるけど」と昇吾さんが笑う。

父からの教えを地域の子どもに

鮮やかな色調にグラデーションの技法を駆使し、海上でも映える大漁旗を作る。八十六歳の体力をカバーする気力で伝統の技を伝えるが、現在、跡継ぎはいない。

「弟子ら、よう育てよか、この歳で」と昇吾さんはいうが、八年前に右目を悪くしてから、より慎重に作業するため、製作にも時間が掛かる。「バランスが悪くて目に一番苦労しよる。足が決まらんと、手まで響いてくる。下絵通り、やれんの」と、歯がゆい気持ちをこらえ、注文をこなす。

紀北町海山区の島勝小学校が休校になる二十年ほど前、知人から頼まれ、学校の思い出に児童と大漁旗を作ったことがある。それがきっかけとなり、地元の小学校での大漁旗体験学習が十年ほど続き、郷土の工芸を知る機会となった。職人肌の人には気難しいイメージが少なからずあるが、朗らかに照れくさそうに笑う昇吾さんに、子どもたちは懐いたことだろう。やわらかな物腰だが、仕事に対する誠実さは人一倍だ。

十二月の訪問時には、尾鷲神社の「ヤーヤ祭り」で掲げる大きな幟を製作していた。工房の端から端まで吊された六メートル五十センチの生地の向こうに、帽子を被って筆を進める昇吾さんの姿があった。「尾鷲神社はあと二年後に御遷宮です。二十八歳の時に初めて親父と一緒に何本も幟をさせてもらいました。その時に江戸時代の染め方も教えてもらいまして、油煙墨を柿渋に混ぜてやる方法です。そういう染め方もあることを覚えとけって、川原へ行って干しました。えらい親父やったんじゃ。今度の御遷宮をできるなら四回目で米寿。何とか染めてみたい」。

大漁旗のことを地元では「フラフ」という。オランダ語で旗という意味の「VLAG（フラフ）」ではないだろうかと昇吾さんはいう。遠洋に出た漁師が聞いた、わが船を示す旗のこと。万助屋の大漁旗は、尾鷲の漁業とともに歴史を刻んできた。

1.糊を乾かして塗り作業。頭の中にイメージしたものを真っ白な生地に直接大胆に描いていく　2.使い込んだ刷毛。使う染料は10種類ほど　3.糊置きに使う筒袋。工房内の道具は整理整頓されている　4.素早く、かつ丁寧に。迫力のある書体そして縁起物の絵柄など、すべてが芸術作品　5.余分な染料を洗い落とす。布を傷めないようにブラシで丁寧に作業する

6.梶賀のハラソ祭りでは何枚もの大漁旗がクジラ船と港を彩る　7.島勝小学校の子どもたちと大漁旗の写真。これがきっかけとなり体験学習がはじまった

船の進水式や大漁を祝って掲げた大漁旗は海に映えるアート

information 万助屋　尾鷲市朝日町8-26　文・写真／中村元美　デザイン／chica